



上里町収蔵品展 Ⅰ

身近なモノの今昔

— 変わるモノ、変わらないコト —

令和6年7月1日（月）

～令和6年9月30日（月）

上里町立郷土資料館

ごあいさつ

2020 年に日本国内で新型コロナウイルス（COVID-19）の感染が拡大して以降は新しい生活様式に対応するため、2～3 年で身の回りの様々なモノが姿を変えました。

コロナウイルス感染症の流行という要因があったにせよ、私たちが実感することが出来るようなモノの変化を2～3年という短い時間をもたらしたのであれば、100 年や 1000 年という長い時間は、例え同じ役割を果たすモノであったとしても、モノの姿や機能を大きく変化させたことが考えられます。

そこで今回は、埋蔵文化財や民具を始めとするかつて上里町で使われていた道具と、それらと同じ役割を果たす今の道具をご覧頂きます。道具の昔から変わっていない部分や変わった部分を考えてみたり、昔と今の生活を比べてみたりするきっかけになれば幸いです。

凡例

1. 本書は上里町立郷土資料館企画展「身近なモノの今昔－変わるモノ、変わらないコト－」（会期：令和 6 年 7 月 1 日～令和 6 年 9 月 30 日）の展示解説です。
2. 本展の企画及び、本書の作成は生涯学習課文化財係生野一志が担当し、郷土資料館スタッフの助けを得ました。
3. 本書の内容は展示の構成と概ね一致しますが、一部で異なる場合があります。
4. 本展で展示した資料（写真、図版を含む）は特に記載のない場合を除き、いずれも町教育委員会の所管です。

大切なことを知らせる

江戸時代に幕府からのお知らせがあった場合には、高札^{こうさつ}で知らされました。この高札は人通りの多い場所に置いて多くの人が見られるようになっていました。

現在町からお知らせがあった場合には、毎月配布している広報かみさとでお知らせしています。また、ホームページや SNS でもお知らせを配信し、お手元のスマートフォン等からでもすぐに確認することが出来ます。



高札 (捨馬札^{すてうまざだ})



広報かみさと



上里町公式
Facebook



上里町公式
LINE

高札に書かれたこと

町では8枚の高札を所蔵しており、今回の展示では「捨馬札」という高札を展示しています。この高札には、「馬を捨てることについては前々から通知していましたが、近頃も馬を捨てる人がいます。厳しい刑罰が言い渡されるところではありますが、まずは今回も流罪^{りゅうざい}が言い渡されます。流罪となった後にも馬を捨てる人がいた場合には、更に重い刑罰が科せられます。」と書かれています。この文から病気やケガをした馬を捨てると、住んでいる場所から強制的に遠く離れた土地や離島へ移住させる重い刑罰が科せられてしまうことが分かります。

小噺：命を大切にー徳川綱吉と「生類憐みの令」

動物愛護の法律と聞いて江戸時代の生類憐みの令を連想する方は多いと思われます。しかし、「俗に生類憐みの令と呼ばれるものは独立した一つの法ではなく、徳川綱吉によってだされた御触れのうち、関連する内容の百を超える御

触れをまとめて呼称したもの」と指摘されています。

そして、所謂「生類憐みの令」では動物だけを保護したイメージが強いですが、捨子の禁止や牢屋の環境改善に関する命令が出されていたので、実際は社会的に弱い立場の人を助ける命令も出されていました。

機械で文章を書く

本来音であるはずの言葉を文字にすることで、私たちは情報を目で見たり、他者に見せたりすることが出来ます。そのため、古くから竹や紙に文字を手で書いてきましたが、手書きでは書き手によって文字にばらつきがありました。そこで、統一された規格の文字を手書きよりも早く印字するタイプライターが19世紀にアメリカで発明されました。

20 世紀後半になると電子技術の向上によって、キーボードから送られる電気信号をコンピュータで文字にすることが出来るようになりました。これによりワードプロセッサやパソコンによる文字入力の実現します。



タイプライター



コンピューター用キーボード

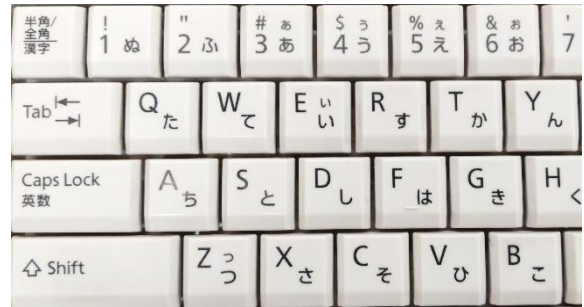
小噺：今でも姿を残す昔の道具

タイプライターは19世紀のアメリカで複数の機種が発明され、その1つにQWERTY配列のタイプライターがありました。この文字配列は1874年に開発され、タイプバーのもつれ防止や、「eとr」や「eとd」などの使用頻度が高い2つの文字を隣接させた長所がありましたが、構造的な短所もありました。そのため、短所を克服した文字配列が開発されました。しかし、タイピストの教育や、新しい配列に対応した機械の導入に膨大な費用を要することから、既に普及していたQWERTY配列を置き換えることが出来ませんでした。

QWERTY 配列は世界中で使われ続けた結果、コンピュータのキーボード配列に採用されました。こうして、タイプライター自体が姿を消した現代でも、コンピュータのキーボードには 150 年以上前に発明された道具の姿が今でも残っています。



タイプライターの文字配列



パソコン用キーボードの文字配列

学校で勉強する

学校での勉強には教科書が戦前・戦後を問わず使われます。戦前には、地理や理科などの今でもある科目のほかに、修身や国史のような聞き馴染みのない科目がありました。これらの教科書は明治時代から使われている旧字が使われ、横書きの文章は右書きとなっています。

終戦後、1948年に公表された当用漢字字体表で示された新しい字体が一般化したことで、旧字は使われなくなりました。また、印刷技術が発展したことでカラー写真が使われるようになり、教科書に載っている図の数や種類が増加しました。



国定教科書



昭和の教科書



平成の教科書

修身：歴史上の人物が行った模範的な行動を習う科目

国史：今の日本史に相当する科目だが、内容が異なる

例えば、今の日本史で最初に教えるのは旧石器時代についてだが、昔の国史では天照大御神の神話を最初に教えている。

小噺：教科書採用の裏にあった大事件

明治 19 年（1886 年）に小学校用の教科書は、文部省が検定した教科書を各府県が採用する検定制となりました。しかし、教科書の採用は大量受注となるため、出版社による贈賄が問題化するようになりました。この状況の中、明治 35 年（1902 年）に出版社が教科書採用の関係者を買収していた記録が明るみに出て、全国で関係者 100 人以上が検挙される教科書疑獄事件が発生しました。この事件により、明治 36 年（1903 年）に小学校令が改正され、修身・日本歴史・地理・国語読本の小学校用教科書は文部省が著作権を有する国定教科書となりました。なお、検定制は第二次世界大戦後に復活し、昭和 24 年度（1949 年）から出版社の小学校用教科書が再び使われるようになります。

お金を払う

日本では 7 世紀に最初の銭貨である富本銭を発行して以降、10 世紀までは国内で銭貨を発行しましたが、一般人がお金で物を売ったり買ったりするようになるのは、鎌倉時代に海外製のお金が大量に日本へ持ち込まれてからになります。その後、江戸時代には全国で統一された通貨が国内で発行されるようになりました。このとき、金貨と銭貨は枚数で金額が決まる^{けいすうかへい}計数貨幣、銀貨は重さで金額が決まる^{しょうりょうかへい}秤量貨幣と定められました。なお、後に銀貨の計数貨幣も登場します。

明治時代には 1871 年に施行された新貨条例によって円・銭・厘が成立しました。そして、この銭と厘は 1953 年施行の少額通貨整理法によって使用禁止となり、今では円だけが使えるお金となっています。



寛永通宝



二分金（偽物）



一厘硬貨



10 円札

小噺：郷土資料から読み解く“円”の今昔

“円”というお金の単位は現在まで約 150 年使われていますが、「今の 1 円」で「昔の 1 円」のものが買えるのでしょうか。そこで、町の記録から「昔の円」について考えてみます。

1904 年に行われた^{けんむじんじょう}乾武尋常小学校（現在の賀美小学校）の改築に「校舎二棟 建築費四九五〇円」かかったと記録されています。現代の感覚では「4,950 円」はあまり大きい金額とは感じられません。しかし、学校の改築という大事業の費用なので「四九五〇円」はとても大きな金額になることが考えられます。

食材をすりつぶす

縄文時代はクリやドングリを石皿と^{すりいし}磨石ですりつぶして食べていました。今は石ではなく内側におろし目があるすり鉢が使われています。すり鉢は平安時代末以降に中国から伝来し、鎌倉時代には国内で作られるようになりました。特に^{びぜん}備前（今の岡山県）は有名な生産地の1つで、作られたすり鉢は全国に流通しました。



石皿



すり鉢（室町時代～江戸時代）



すり鉢

小噺：石器に残った縄文時代のデンプンから分かったこと

縄文時代の貯蔵穴からドングリやクルミなどが出土したことで、縄文の人たちが食材としていたことが明らかになっています。しかし、土に分解されて遺跡から出土しない植物は、食材として利用された確証はありませんでした。そこで縄文時代にすりつぶされたものを石器から回収する実験が行われました。その結果、ドングリのほかに、すりつぶされたマメやユリ、カタクリなどが確認されました。

この実験により、縄文人はドングリやクルミだけでなく、ユリ根やカタクリをすりつぶして食べていた可能性が高まりました。

火をつける

木と木を擦って火種を作る方法は縄文時代以前から使われ、弥生時代になると日本各地の遺跡から火起こし器が見つかるようになります。その後、奈良時代には火打石が使われるようになりました。

明治時代には日本でマッチが生産されるようになりました。マッチは火を着けるだけでなく、箱が広告になったことで非常に身近なものでしたが、1975年頃に100円ライターが登場したことで姿を消していきます。



火おこし器



火打石



マッチ



ライター

小噺：実は身近な危険物だったもの

摩擦マッチはこすれば簡単に火がつけられる便利なものでしたが、命に関わるような強い毒を持ち、約30～60℃程度で発火する可能性があった黄リンを着火剤に使っていたので、危険なものでもありました。しかし、摩擦マッチは海外への輸出品だったので、日本では1922年に^{おうりんマツチ}黄燐燐寸禁止法が施行されるまで生産が続きました。

黄リンの使用が禁止されて以降は、実務上無毒で250℃以上の温度でようやく発火する赤リンを使用した安全マッチを生産するようになりました。

料理を取り分ける

古墳時代に登場する土師器は日用品だったと考えられています。町内では弥生時代の伝統が残る土師器のほか、須恵器や施釉陶器といった手に入りにくい貴重品の形をまねて作った土師器が出土しています。

時代が進むと国内で陶器や磁器の生産が始まったため、これらの器は貴重品から日用品へと扱いが変化します。



土師器坏(古墳時代)



須恵器坏(古墳時代)



土師器坏(奈良時代)



高台付碗（平安時代）



灰釉陶器碗（平安時代）



碗（明治～大正時代）

小噺：その器には何を？－奈良時代の食事風景

都に住む貴族は様々な食材で作られた豪華な料理を食べていました。その一方で、農村に住む人たちは、蒸した粟や稗などの雑穀と野菜で作った汁、野菜や魚で作った1品のおかずを1日に2回食べていました。

お米を調理する

弥生時代から古墳時代中期までは、甕でお米を茹でる「湯取り法」で炊飯していました。その後、古墳時代後期に強力な火を生み出せる竈が伝来したことで、甕と蒸し器の甑を使ってお米を蒸すようになりました。

平安時代以降は羽釜が登場し、炊飯方法がお米の量に対して決められた量の水で炊く「炊き干し法」に変化しました。そして、今多くの家にある炊飯器でも同じ方法でお米が調理されています。



甕（古墳時代中期）



甕（古墳時代後期）



甕（古墳時代後期）



羽釜（平安時代）



羽釜（昭和）



炊飯器(現代)

小噺：お米を蒸すことの難しさー実際にやって分かったこと

奈良時代の遺跡から出土する土器や文献資料から、この時代の炊飯方法が蒸すことであつたと分かっています。しかし、調理されたご飯については不明なことが多いため、延喜式の方法で洗米した現在のうるち米を蒸す実験が行われました。その結果、炊飯器で炊いたご飯よりも硬くぼそぼそとした生米に近い仕上がりになることが分かりました。

この結果から蒸しただけのお米を日常的に食べることは難しいことが分かりました。そのため、蒸すという工程と何か「あとひと手間」があつたのかもしれませんが。

参考文献

- 阿部道生 2022「生命倫理の視点からみた徳川綱吉の治世についての研究」『鶴見大学研究紀要・第4部,人文・社会・自然科学編』第59号 pp.99-107
- 宇野隆夫 1997「中世食器様式の意味するもの―計量分析による使用法の復元―」『国立歴史民俗博物館研究紀要』第71集 pp.377-430
- 大島一元 2009「日本最初の教科書」『近創史』No.7pp.38-41
- 上里町教育委員会 1987『金久保内出遺跡発掘調査報告書』
- 上里町教育委員会 1996a『上里町史 通史編上巻』
- 上里町教育委員会 1996b『上里町史 通史編下巻』
- 上里町教育委員会 1996c『上里町史 資料編』
- 上里町教育委員会 1997『田通遺跡―田通土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書―』
- 上里町教育委員会 2000『水引塚遺跡』
- 上里町教育委員会 2024『高野谷戸遺跡 第二次発掘調査報告書』
- 小林正史 2022「弥生時代から中世への主食調理方法の変化とその背景としての米品種交替仮説」『北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要』第15号 pp.57-80
- 近藤裕幸 2017「国定教科書『中等地理』廃止の法令上の理由」『地理学報告』第119号 pp.113-122
- 西野幸江 2023「甑（蒸し器）を使った古代の炊飯方法」三船隆之、馬場基編『古代の食を再現する 西大寺では何を食べていたか』pp.53-62
- 柴垣勇夫 1994「古代・中世の猿投窯にみる中国陶磁の模倣」『愛知県陶磁資料館研究紀要』第13集 pp.16-26
- 橘敏夫 2019「綱吉政権期の捨馬札」『交通史研究』94集、pp.46-59
- 千葉千枝子 1977「教科書行政に関する一考察：明治期の教科書疑獄事件が示唆するもの」『東京家政大学研究紀要1 人文科学』第17巻 pp.29-36
- 備前市教育委員会 2013『備前窯詳細分布調査報告書』備前市埋蔵文化財調査報告11
- 名和小太郎 2005「QWERTY 配列」『情報管理』47集 pp.839-841
- 服部敬史 1996「関東地方の歴史時代の土器」大川清ほか編『日本土器辞典』pp.912-913
- 藤木聡 2013「発掘された火起こしの歴史と文化」『宮崎県文化講座研究紀要』第40集 pp.23-45
- 三浦豊彦 1985「日本産業の古典的黄燐中毒の歴史」『労働科学』61巻5号 pp.221-233
- 三船隆之 2024『古代人の食と健康』
- 山梨県 2016「遺跡トピックス No.0229 稲山遺跡〔笛吹市〕」参照：2024-04-02
- 山本直人、渋谷綾子ほか 2016「残存デンプン粒分析からみた縄文時代の植物質食料：石川県の遺跡を対象として」『名古屋大学文学部研究論集・史学』第62集 pp.51-82